

兒より、おめでたうの祝詞をのべ、各兒の手になる細工物を、記念として贈り、茶菓の會集もて、互の健康を祝します。かくて誕生日は子供等の、最も樂しき人生を味ふ一日となつて居ます。おばさんの幼稚園の此頃は、朝は七時頃からぼつくと參ります。子供等はおばさんのおそい時には向ひに參ります。かくておばさんと一緒に朝顔の水

## ブラジルのお伽話

かけや雑巾がけ、お庭の水打と一通りに片付きますれば、緑の木蔭に、水鐵砲、砂場の日覆に、猿の如く柱のぼりや、軒づたひ、お室の中には、豆細工やら積木やら、切紙、貼紙、摺紙、タイコ、おてだま、まりつきと、思ひくのお遊に、おばさんも、子供も、暑さを忘れて、元氣よく、其日其日を過して居ます。

### まだらの牝雞

昔、或處に白い小さい牝雞が居ました。或日、朝御飯にしようと、一生懸命地面をほちつて虫をさがして居ました。地面を掘りながら牝雞はひく

日本橋高等女學校  
附屬幼稚園保姆

檜 山 京 子 譯

い小さな聲で「コッ、コッ、コッ」とくりかへし唄をうたつてゐました。

すると、不意に土の上に小さい紙片のおちてゐるのを見つけました。

『コッ、コッ、コッ、あゝこれはいゝひろひものをし

たこれは書き付けにちがひない。いつか私達の王様がちぎあそこの牧場で裁判をなさつた時、大勢の人達が書き付けを持ってきて王様のおそばへ差し上げて行た事があつた。私はつまらない牝雞だけと折角のこの書き付けを、さうだ、私は王様の處へ差し上げて來ませう。』と獨語を云ひました。

次の朝、白い小さい牝雞は大元氣で遠い旅に出かけました。牝雞は書付けを落さないように大事に、茶色の籠へ入れて持て行きました。

王様の御殿のある處までは大層遠ございました。白い小さい牝雞はこんな遠い處へ出かけるのは生れてはじめてでした。

少し行くと、牝雞はお友達の狐に逢ひました。

狐と牝雞とは皆さんも御存じのやうに大い仲がよくないのですけれど、この狐は特別に牝雞のお友達でした。

それは、ずつと前に狐が畏から逃げようとした時、牝雞が助けたので狐はその親切を忘れなかつ

たのです。

『まあ、白い小さい牝雞さん、どこへいらつしやるの』と、狐がきゝました。

『コッコッコ、私は王様の御殿へ書き付けを差しあげに行くのです』と、白い小さい牝雞が答へました。

『まあ、ほんとうに、白い小さい牝雞さん、私も一處に行きたいこと、お願だからつれて行て下さいな』と狐が云ひました。

『え、よございませすとも、王様の御殿まで行くにはずるふん長くかゝるのですよ、おいやでなければ私の茶色の籠にはいつていらつしやいませんか』と、牝雞が云ひました。狐は茶色の籠へはいりました。

しばらく行くと、牝雞は川の處へ來ました。

或時この白い小さい牝雞は川の困てゐるのを助けました。それは川が氣味の悪いいやな蟲を、やつとの事で川のふちへほうり出しましたがまた匍ひ

もどつて來はしないかと心配してビク／＼してゐた時、この牝雞が其の蟲を食べてしまつてくれたのです。

それから、いつでも川と白い小さい牝雞は仲よしでした。『まあ白い小さい牝雞さん、あなたはどこへ行くのですか』と、牝雞を見ると、いきなり川が呼びかけました。

『コッコッコ 私に王様の御殿へ書き付けを差し上げに行くのです』と答へました。

『まあ、白い小さい牝雞さん、私も行かせて下さい』

と、川が頼みました。

白い小さい牝雞は快よく承知して、『では茶色の籠へはいつて下さい』と云ひました。

それで川は茶色の籠にはいりました。

白い小さい牝雞は、かうして旅をつづけてゐるうちに、ふと、火の處へ來ました。

或時、火が大層弱つて死にさうになつてゐた時、

白い小さい牝雞は枯草を持て來てくれました。そのおかげで火は新しい勢が出ました。それから後白い小さい牝雞はいつも火と仲よしでした。

『まあ、白い小さい牝雞さん、あなたはどこへ行くのですか』と、火が聞きました。

『コッコッコ 私に王様に書き付けを差し上げに王様の御殿へ行くのです』と云ひました。

『まあ、白い小さい牝雞さん、私も一處に行つて下さいますか、私は一度も王様の立派な御殿を見た事がありませんし、また王様を一目も見つた事がないのです』と、火が申しました。

白い小さい牝雞は快よく承知して、『では茶色の籠にはいつて下さい』と云ひました。

この時、茶色の籠は、もう一ぱいで、皆で種々工夫しても、どうしても火のはいる場處がありませんでした。

とう／＼おしまひに、ことを考へ付きました。火は自分で灰に變りました、それで丁度よく籠の

中へはいれました。

それから白い小さい牝雞はどん／＼／＼／＼旅をつづけて無事に王様の御殿へ着きました。

『あなたは誰ですか、そしてあなたのさげてる茶色の籠には何がはいつてゐるのですか』と門番は戸をあけながらききました。

『私は白い小さい牝雞でございます、王様に書き付けを差し上げにまゐりました』と、答へましたが茶色の籠には入てゐる狐や川や火の事については何も申しませんでした。牝雞はあんまり大きな立派な御殿の、強さうな門番の前に出たので、ドキドキして聲もろくに出ないほど驚いてゐたからです。

門番は白い小さい牝雞を御殿の入口の廣間の方へよんでそれからずつと、奥の奥の王様のいらつしやるお室までつれて行きました。

白い小さい牝雞は王様の御前へ出て大層丁寧におじぎをしました。あんまり丁寧にしようと思つ

て低く／＼首を下げたので、きれいにならんでゐた白い羽根がモチヤモチヤになつたほどでした。

『お前は誰だ、そして何の用があつて來たのか』と王様は太い大きな王様らしい聲でおたづねになりました。

『コッココッコ私は白い小さい牝雞でございます』と、おそる／＼細い小さい聲で申しました。

『私は王様に書き付けを差し上げに來たのでございませう』と、云て長い旅の間中茶色の籠の一番底にしまつてあつた書き付けを王様にお手渡し致しました。

その紙片には、丁度狐の足がのつて居た處に泥のあとがついて居ました。川が居た處はしめつぱくなつてゐました。それから火が灰になつてゐた處には小さい穴がポチポチあいて居ました。

『己を誰だと思ふ。己は王様だ。こんなきたない紙片を持って來て何にするのだ。』と太い大きな聲で王様は云ひました。

『已は前から牝雞は、ばかなものと思つてゐたが、お前はほんとうに大馬鹿な奴だ、さあ』と王様はお附きの者をふりかへつて『この馬鹿な白い小さい牝雞をあつちへ持て行て雞小屋にほうりこんでお置き、明日のお晝の御馳走にいゝだらう』と、おつしやいました。

一番丈の高いお附きの者が白い小さい牝雞をぎうつとつかまへ、お二階を下り、裏門を通して雞小屋の方へつれて行きました。

白い小さい牝雞は御殿へ来る長い旅の間も御殿に着いてからも、たえずさげてゐた茶色の籠をこんなひどい目にあつてもまだはなさずに持て居ました。

白い小さい牝雞が御殿の雞小屋へ入れられますと、前から居たたくさんの他の雞は一度に牝雞をとりました。そしてその中のどれか、牝雞の白い小さい羽根をひつぱりました。それから他の目はつゝかうとしました。又他のはさげて居る

茶色の籠のふたを取らうとしました。すると、籠から狐がとび出しました。目をキョロ／＼させてそこに居た御殿の飼ひ雞を一つものこさず追ひまわして食べてしまひました。

そのさわぎを聞きつけて、何事が起たのかと、王様も皇后様もおそばのお附きも、他の人達も御殿中の人達が皆出て來ました。

狐は一番に逃げました。白い小さい牝雞もさかさ逃げました、それでもまだ茶色の籠を忘れずにさげてゐました。

王様の御家臣たちは大急ぎで牝雞のあとを追ひかけました。

も少しでつかまりさうになつた時、茶色の籠から、急に、川がとび出して、御家臣たちと白い小さい牝雞との間を流れました。船なしでは川を越すことが出来ません。

多勢が船をもつて來てそれに乘て、川を越す間に、白い小さい牝雞は可成遠くまで逃げました。

牝雞が、丁度いゝかくれ場處のある森のそばまで逃げて來た時に追手の御家臣達は、もうすぐ追ひつきさうになつてゐました。

と、茶色の籠に灰になつては入て居た火が外へとび出しました。すると急にそのへんが煙のやうに暗くなつて追つかけて來た御家臣達はお互の顔も見えないようになり、ました。そして牝雞がどつちの方へ逃げたかはなほさら見る事が出来ませんでした。

御家臣たちはどうする事も出来ず、しかたなしに其儘御殿へ歸りました。王様のお晝の御馳走は雞のお料理の代りに羊と子牛の肉でした。

灰に代つた火は籠からとびだす時、あんまりふいに出たので、白い小さい牝雞の上にもかゝりませんでした。

それでその日から牝雞の白い羽根の、灰のかゝつた處にはまだらが出来ました。そして、いつまでもそのまゝでゐました。

まだらになつた此の牝雞のひよこはやつばし、まだらな羽根でした。

そして其のひよこのひよこも、また其のひよこのひよこもずつと、みいんな、まだらでした。

まだらの雞の一番はじめのお母さんが、白い小さい羽根の雞だつた事と、その白い小さい雞が王様の御殿へ書き付けをあげに行き種々な目にあつて、とう／＼まだらな羽根になつた事と、おわかりになつたでしょ。

## 兎の尾

ずつと昔、兎は長い尾を持って居ました。

そして猫は短かい尾を持って居ました。

兎の尾は、ほんとうに長くて立派で、猫がほしいくと思てゐる通りのでしたからいつも羨ましがつてゐました。兎はいつもぼんやりしてゐて賢い獸ではありませんでした。

或日、兎は例の長い立派な尾をピンと後へたて

ながら、晝寢をしに出かけました。

猫のブッスさんは能く切れるナイフを持って、その後からついて行つてブツリ、と一呼吸に兎さんの尾を切つてしまいました。ブッスさんは大層はしこい性でした。兎さんが見附けないうちに、切れた尾を自分の身體に縫ひつけてしまひました。そして、

『此の尾はあなたが持てゐらつしやるよりも、私につけた方がよく似合ふでしょ』と兎に申しました。

『大層よくお似合ですよ』と、おとなしい、怒りつぽくない兎さんが答へました。

『その尾はどつちにしても私には長すぎたのです。あ、いい事ませう、もしあなたが其の能く切れるナイフと取りかへつこにして下さるならその尾はあげませう、』と云ひました

ブッスさんは兎さんにナイフをあげました。それを持て兎さんは森の方へ行きました。そして、

『私は尾をなくしたけど、こんなよく切れるナイフが出来た。新しい尾か、もつと外のいいものがして来よう』と獨語を云ひました。

しばらくの間、森のあち、こちを飛びまわつておしまひに、小さなお爺さんが一生懸命葦草で、籠をあんて居る處へ来ました。

お爺さんは、一寸兎の方を向いた時、兎さんの口に啣へてゐるナイフを見附けました。

『まあ兎さん、どうぞお願ひだからあなたの持つていらつしやる能く切れるナイフを貸して下さいませんか、この葦草を齒でかみ切るのはずぶぶん骨が折れるんですよ』と申しました。

兎はすぐ、ナイフを貸しました。

お爺さんは、よろこんで、ナイフで葦草を切りはじめました。すると、バチツ、と音がして半分に分れました。

『まあ、まあ、私はどうませう、あなたは私の大事な、新しいナイフを壊してしまつた』と、兎さん

が云ひました。小さいお爺さんは、

『こはすつもりぢやなかつたのだがすまない事をした』と云ひました。

兎さんは『こはれたナイフは私はいらないけど、あなたはこはれて、も使へるでせう、あ、い、ことしませうナイフの代りにあなたの造つていらつしやる籠を一つ下されば、とりかへつこにナイフはあなたにあげませう』と云ひました。それで小さいお爺さんは兎さんに籠をあげました。兎さんはそれを持つてまた森の方へずん／＼行きました。

『尾をなくしたけど、ナイフが出来た。ナイフをなくしたけど、籠が出来た。私は新しい尾か、もつと外のいゝものをみつけませう』と、兎さんは獨語を云ひました。そして、あつち、こつち、長いこと飛び歩いて、畑の處まで来ました。

そこにはお婆さんが、一生懸命に、ちしや菜を摘んで居ました。そしてたまつたのをエプロンにあつめて居ました。お婆さんはふと兎さんの方を

向いて、兎さんが良い籠をもつてゐるのを見附けました。

『まあ、兎さん、お願いだから、あなたの持てゐらつしやる籠を貸して下さいませんか』と、云ひました。

兎さんはすぐ籠をかしました。お婆さんはよろこんで、せつせと菜をかごへつめはじめました。すると途中で、スポツ、と籠の底がぬけてしまいました。

『まあ、まあ、どうしませう、どうしませう、私はどうしませう、あなたは私の大事な／＼新しい籠をこはしてしまひました』と、兎が云ひました。

『こはすつもりぢやなかつたのにすまないことをしました』と、お婆さんが云ひました。すると兎は、

『あ、いゝ事がある、あなたのそのちしやなを少し下されば私はその籠をあげませう』と、云ひました。



お婆さんは兎さんに、ちしや菜をやりました。  
兎さんはそれを持って、

『私は尾をなくした、けど、ナイフをもらつた。

ナイフをなくした。けど、籠をもらつた。籠をなくしたけど、ちしやなをもらつた』と、云ひながら森の中を飛んで行きました。其の中、兎さんは、大層お腹がすいてきました。そして、さつきもらつた、ちしやなが、ブンブン、おいしきうな、にはひがするので、一口食べてみました。するとおいしいの、なんのつて、生れてからこんなものは食べたことがないほどおいしいのでした。

そして兎さんは、

『私は尾がなくてもいい。もつと私の好きな、いものをみつげませう』と云ひました。

それからはどの兎も、先のやうな立派な尾はなくなりまし

た。そして、どの兎も、尾のないのを氣にする兎もありませんでした。

それからちしや菜のきらいな兎もありませんでした。

ちしや菜が、たくさんあれば、兎は何よりもそれをよろこびました。

## ひきがへるのブツ／＼

ずつと昔、ひきがへるは、すべ／＼した、きれいな身體でした。そして毎日／＼あつちこつち、方々歩きまわつて、めつたに家に居たことはありませんでした。

誰でもお客様を呼ぶことがあると、どんな遠い處でも、どんなに長くかゝる處でも、きつと、出かけて行きました。

或日のこと、天から、お客様をするからいらつしやいと呼ばれました。

『いくらおよばれが好きでも、今度のお客様には行かれないでせう。地面の上でさへ、あなたの足はのろいんですものね』と、狢狢がひきがへるに云

ひきました。

『行かれるか行かれないか、まあ見てゐらつしやい』とひきがへるが云ひました。

ひきがへるの家のそばに黒い大きい、ノスリがすんでゐました。ノスリは皆からきらはれて一人もお友達がありませんでした。

ひきがへるは、ノスリの家へ行きました。ノスは家の外で、ヴァイオリンを弾いてゐました。

『おはやう、ノスリさん、あなたは天のおよばれにいらつしやいますか』とひきがへるが云ひました。

『行かうと思つてゐます』と、ノスリが答へました。

『それは結構でございます、御一處にお供しませうか』とひきがへるが云ひました。

一人もお友達をもつた事のないノスリは、ひきがへるのおつれが出来たので大層よろこびました。

『御一處に行かれるなんて、こんなうれしい事は

ありません、いつ頃出かけませう』と、申しました。

『四時に出かけませう、私の家へいらつしやい、それから御一處に行きませう、ノスリさん、あなたは、ヴァイオリンを忘れずに持ていらつしやいよ』と、ひきがへるが申しました。

四時になると、早速、ノスリは、約束通りヴァイオリンを持って、ひきがへるの家へ行きました。

ひきがへるは、『私、まだ仕度がすみませんから、戸の處へ、ヴァイオリンを置いて、まあ、おは入りなさい、今、ちぎですから』と、申しました。

ノスは戸の外に、ヴァイオリンをそつと置いて、ひきがへるの家へは入りました。

すると、ひきがへるは窓から飛び出した、ヴァイオリンの中へ、は入てしまひました。

ノスリは、かへるの仕度の出来るのを待て、待つて、待ちとほしましたが、どうしたか、かへるの聲もしません。まちくたびれて、ノスはヴァイオリンを持って、天へ出かけました。

ノスリが天へつきました時には、およばれの間よりも少しおそくなつてゐました。ノスリはひきがへるを待てゐておそくなつた、と、話しました。

『まあ、ひきがへるをまつてゐるなんて、ばか／＼しいこと、どうして、ひきがへるが天までこられるのですか、あんまり、およばれが好きだから、一寸、よんで見ただけなのです、まあヴァイオリンをそこへ置いて、御馳走の方へいゝつしやい』と、御主人が申しました。

で、ノスリは、ヴァイオリンを下へ置いて行きました。そして、誰もゐなくなつた時、ひきがへるは、ヴァイオリンの中から出て來ました、そして大きな口をあいて笑ひながら。

『まあ、だから皆は、私が來れないと思つてゐるんだ。これはおもしろい、私が此處にあるのを見たら、どんなにびつくりするだらう』と、云ひました。

其日のお客様の中で、ひきがへるほど、うれしそうに、御馳走をたべた者は、ありませんでした。ノスリが、どうして天へ來たかたづねたとき、

『いつか、話してあげませう』と云つたきり、おもしろさうに、踊つたり、食べたりに夢中になつてゐました。

ノスリはお客様に來ても、ちつとも、面白いと思ひませんでした、それで皆より早く歸らうと思つて、御主人に、さようならも、云はずに、自分のヴァイオリンも持たずに、すん／＼自分の家へ歸つてしまひました。

お客様がすんでから、ひきがへるは、ヴァイオリンの中へは入りました、けれど、誰も、ヴァイオリンを取りに來ませんでしたから、中でひきがへるは、どうしやうかと困つてゐました、しばらくすると、鷹がヴァイオリンを見附けて、

『あゝ、これはノスリのだ、きつと忘れたのでせ

う、届けてやりませう』と、云てヴァイオリンをもつて地面の方へ飛んで行きました。

ひきがへるは、ヴァイオリンの中で大層ゆれたので、くたびれてしまひました。鷹もくたびれてしまひました。

『あ、私はもう、こんな古ぼけた、おもいヴァイオリンなんかもつて行くのはいやだ、ノスリなんぞ私のお友達でもないのに、つまらない事をした』と、云て、其儘下へおとしました。

ヴァイオリンはどん／＼下の方へ行つて、もう／＼砂利の處へ落ちました。

『あ、もし／＼、小石さん、小石さん、私の道をあけて下さい』と、おちた時、ひきがへるが申しました。

けれど小石は、つんぼでした。小石は道をあけてはくれませんでした。

ひきがへるが、こはれてヴァイオリンから、やつと、はひ出した時には、身體中いつぱい、けが

をして、ブツ／＼になつて、家に歩いて歸れないほどになつてゐました。ノスリは、自分のヴァイオリンがどうなつたか、またすべ／＼した身體のきれいなひきがへるが、どうして、あんな、きずだらけのブツ／＼のかへるになつたかも知りませんでした。

今でもしきがへるの身體にはたくさんのあとがあります、そして、それからもうこりて、あつち、こつち、あるさまはることはよしました。

(The Fairy Tales from Brazil より)